

人生踏み出すきっかけに

アジアの玄関口・福岡の特色を生かし、55の国・地域の子どもの草の根交流を続ける「アジア太平洋子ども会議・イン福岡」の設立25周年記念映画「空飛ぶ金魚と世界のひみつ」が今夏、公開される。一般市民約200人が制作に協力。その呼びかけ人として「歴史ある活動の思いが伝わる映画になった」と胸を張る。

市民参加映画の仕掛け人 広田 稔さん(49)

る。日本のホームステイ先には、県内の一般家庭が協力する。活動に関わったのは第7回の95年。家業の不動産会社を継ぐため、8年ぶりに福岡に戻った時点で、最初は人脈を作るきっかけのつもりだったが、だが、子どもを引率して出向く先々で、熱烈な歓迎を受けた。交流が深まるにつれ、世界が日本に寄せる期待やまなざしを知り、「アジアと切っても切れない福岡で、子ども会議は未来のリーダーを育てる大事な活動」と確信した。

事業は2002年にNPO化し、ポスターや交流の軌跡を追ったドキュメンタリー作品で地道にPRも続けるが、支援の輪を広げることが悩みの種だった。そんな時、地域活性化のセミナーで、住



市民への呼びかけ人として尽力した広田さん

は実際の活動風景を見てもらい、劇中にホームステイなどの場面を織り交ぜ、携わる人々の思いはセリフに込めた。

撮影は福岡で今年1月に約20日間行い、糸島市の中学生がエキストラで参加した他、小道具提供やスタッフの食事作りにもボランティアが関わってくれた。

作品は、日韓の少年の友情、中国人女性と再婚する父に心揺れる娘、新人空港スタッフと乗客の出会い――の三つの物語が交錯して進む。8月に市内の映画館で一般公開され、英語字幕版はアジ

25NPO設立「活動への思い込めた」

民を巻き込みながら各地で映画を作る林弘樹監督に出会った。昔、「ロッキー」を見てポクサーになりたいたと心動かされた。

映画はみんなが一步踏み出すきっかけになる」

冷やかだった周囲をただ、林監督や脚本家に

説得し、2年前の夏、プロジェクトが始動した。

「活動を全く知らない人の心に届く作品にした」と、重厚なドキュメンタリーではなく、フィクションにこだわった。ただ、林監督や脚本家に

【青木絵美】

この人！

子どもたちを迎え